

第20回学会発表のまとめ

ヘーゲル哲学における導入と端緒について

真田 美沙（社会学研究科博士課程）

ヘーゲル哲学における学の端緒 *Anfang* の問題は、『大論理学』「学は何から始められなければならないか」で論じられている。この問題についての先行研究に、ヘンリッヒやフルダ、ルーカスのものがある。しかし近年刊行された新講義録において「予備概念」の箇所の変遷過程で「直接知」の立場の記述がより詳細になっていることや、ボンデッリによるラインホルトの端緒に関する研究の深まりを考えると、ヘーゲル哲学における学の端緒と、その背後にあるヤコービとラインホルトからの影響が明らかにされなければならない。

そこで発表原稿の第一節では、『大論理学』存在論における端緒の問題を概観した。ヘーゲルは学の端緒について述べる際に直接性と媒介の不可分さを指摘しており、しかし同時に学の端緒においては、「決意」を通じて、前提をもつ状態から無前提へと進むことが要求されているとする。

そこで第二節では、直接性と媒介の不可分さに関する議論が見られる、『エンチクロペディ』「思想の客観性に対する三つの態度」の第三の立場である「直接知」を確認した。ここは主にヤコービの直接知に関する批判が展開される箇所である。ヤコービは媒介の排除によって直接性を考えるが、ヘーゲルはそのような考えを退けて、直接性のうちにもすでに媒介があるとする。そして「直接知」に関する最後の節では、前提については学問の中では捨てられなければならないという点が、懐疑主義との連関の中で言及される。しかし、ヘーゲルが一概に反ヤコービの立場を貫いたわけではない。このことは、特にヘーゲルの「ヤコービ書評」（1817）におけるヤコービについての肯定的な評価と切り離すことができない。

第三節では、「直接知」におけるヤコービ批判を「ヤコービ書評」とのかかわりから考察し、そこでの「媒介の廃棄であるところの媒介」というヘーゲル独自の観点を取り出すことを試みた。これはヤコービの直接性の強調をそのまま壊さずに、しかも同時にヘーゲルの主張である直接性と媒介の不可分性という局面をも矛盾しない仕方で成立させていると言える。

最後に第四節ではヘーゲルが晩年に再評価することになるラインホルトによる哲学理解とそこでは十分に解決されなかった問題のヘーゲルにおける解決を見た。学の端緒の問題は、体系の問題にかかわり、さらには論理学そのものがどういうものかという点にもかかわる。ヘーゲルは『差異論文』のなかでラインホルトが「助走のための助走」

にかかづらっているとして批判しているのに対し、後の『大論理学』存在論第二版では、ラインホルトの「仮説的で、蓋然的な真理」から出発するという考えの根底のうちに、「哲学の端緒の思弁的本性に関する真の関心」を見出すことでその正当性を示している。このことは蓋然的な真理から出発するとしても、その先の本当の意味での真理へと近づく過程もまた踏まれなければならないということを意味すると考えられる。この過程とは「思惟規定の再建」というヘーゲルが論理学の課題とするものであり、それ自体が一つの媒介であると考えられる。

質疑応答

質問1：スピノザ主義とは当時の文脈でどのように理解されていたのか。そしてスピノザ再評価がなぜ起こったのか。

回答1：レッシングに端を発する論争で、ヤコービとメンデルスゾーンの間で主に展開された。ヤコービに関して言えば、再評価の背景には、トマス・リード（スコットランド常識学派）の影響があったのではないかと考えられる。

質問2：端緒とはどういう意味合いで使っているか。

回答2：端緒は *Anfang* の翻訳で、始元や始まりとも言い換えられる。